

# モジュール科目の到達目標と学習評価について

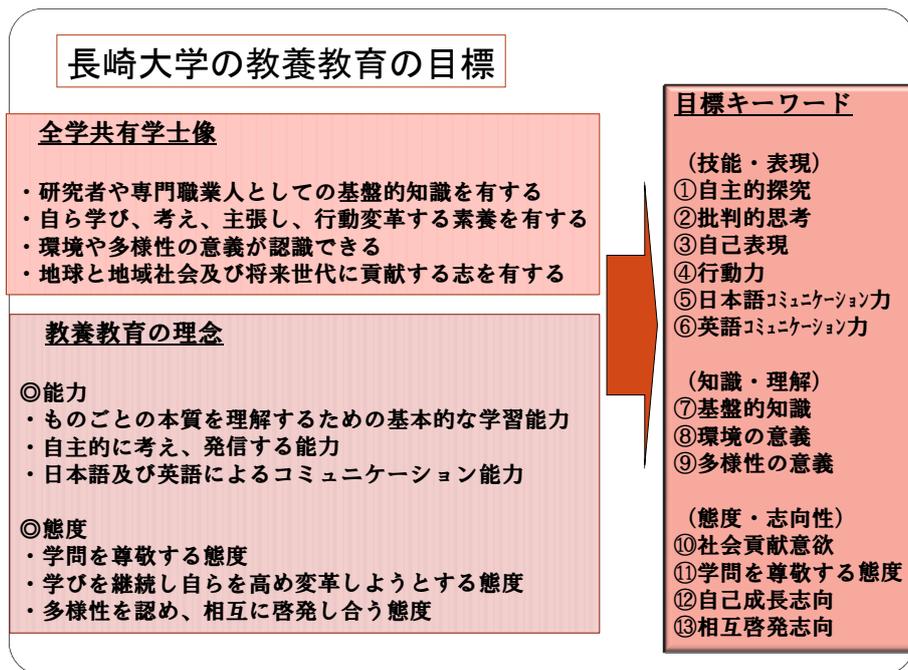
山地 弘起（大学教育イノベーションセンター）

## 1 はじめに

本事例集においては、全学モジュール科目におけるアクティブラーニングの様々な工夫が紹介されています。アクティブラーニングとは「思考を活性化する」学習形態を総称するものですが、そのためには事前の授業設計がこれまで以上に重要となり、しかも学生への学習促進の働きかけが教員の大きな役割となります（山地, 2013）。モジュールにおいては、テーマ責任者のもとで少しでも科目間の連携を図り、授業の内容や方法の調整だけでなく、学生に関する情報交換も進めることで効果的な授業運営が可能になる（少なくとも各教員が独立に試行錯誤をして苦労を重ねるのに比べれば）と期待されていますが、教員団として互いに調整を図るといのは容易なことではありません。ここにはいくつかの理由があると思われ、一つの大きな理由は、モジュール科目が何をねらっているのかが十分共有されていないという点にあるのではないのでしょうか。

モジュール形式がスタートするにあたって、スライド1にあるように、全学共有学士像と教養教育の理念から13の目標キーワードが抽出され、学生向けのテーマ・ガイドブックの中でモジュール毎に各科目の重点目標が示されています。しかし、これが実際の授業方法、ひいては学習評価の仕方に直結しているとは限りません。そもそもこれまで、13の目標をどのように配分すべきかについての突っ込んだ議論も行われて来なかったために、現時点では名目に過ぎない目標提示が多いかもしれません。13という数の多さもまた、授業設計の焦点をぼやけさせることになっているように思われます。

そこで本稿では、モジュール科目の到達目標をより明確にするために、学生の自己評価調査をもとにした目標整理の試みを報告します。それによって、今後の授業設計や学習評価の際の一つの概念枠組が提供できることを願っています。

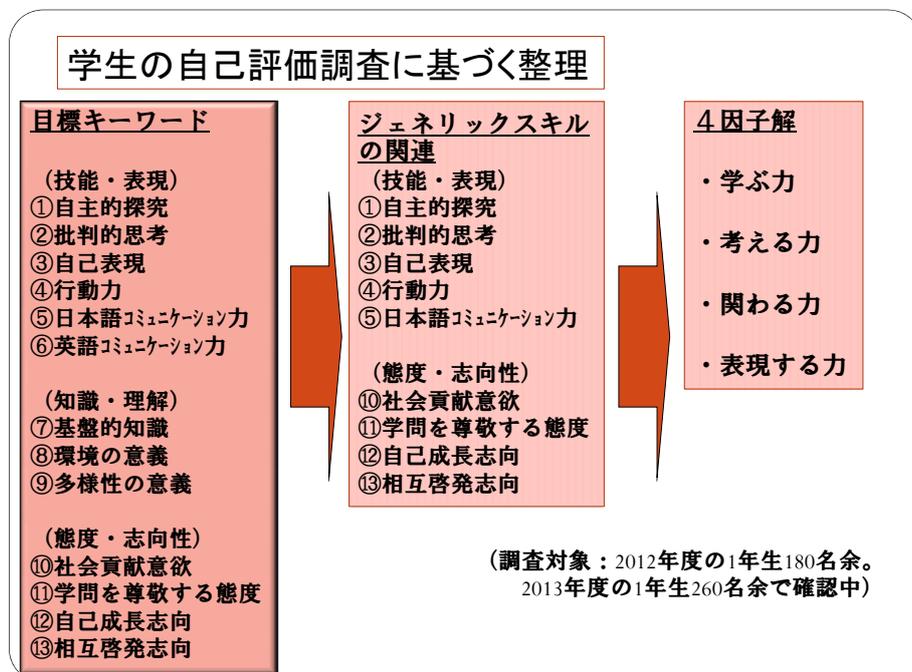


## 2 学生の自己評価調査にもとづく目標整理

モジュール形式の教養教育では、知識習得よりも自主的探究力を始めとするジェネリックスキル（汎用的技能）の育成に重点があります。もちろん、新たな知識習得の伴わない学習活動は有り得ないので、目標キーワードの⑦⑧⑨、すなわち社会生活を営むにあたっての基盤的知識・環境の意義の理解・多様性の意義の理解については、ジェネリックスキルを高めていく学習文脈としてテーマ毎に取り上げ方を調整しておく必要があります。

スライド2に示すように、学生の自己評価調査では、英語コミュニケーション力および知識・理解に関する目標を除いた9つの目標を対象としました。目標キーワードのループリック例（別紙1）を参考に各3項目を作成して、2012年度秋のモジュール開始時に予備調査を、2013年度秋に確認的な調査を行っています。前者の調査から4つの因子（相互に相関の高い項目群）を見出し、それぞれ「学ぶ力」「考える力」「関わる力」「表現する力」と仮に名付けています。その項目内容は、スライド3からスライド5に示す通りです（各項目の前に付いている番号は、質問紙での項目番号です。テーマの選択理由や学習習慣など他の調査も同時に行ったために、番号が大きくなっています）。

「学ぶ力」については、目標キーワードの①自主的探究を中心にした項目群となっています。「考える力」については、②批判的思考を中心とした項目群となっています。ここには、読解やライティングのスキルも含まれているようです。「関わる力」は⑬相互啓発志向の項目から成り立っており、「表現する力」は③自己表現とともに積極的な行動力に関わる項目も入ってきています。以上をまとめた形で、スライド6に、ジェネリックスキルに関わる目標キーワードとこれら4因子との対応を示しています。



スライド2

### 「学ぶ力」因子の項目例

以下、プロマックス回転後0.5  
程度以上の因子負荷量を目安

- 63. 継続して自律的な学びを進めることができる
- 46. 学習を主体的に進めることができる
- 61. 自分の成長を人任せにせず、責任意識をもっている
- 33. 粘り強く探究を継続することができる
- 32. 課題を発見すれば、必要な情報を適切に収集・分析することができる
- 31. 意義や価値を感じる課題を自分で見つけることができる
- 41. 目標達成に向けて計画立てて取り組むことができる
- 55. 身近な地域の課題から地球規模や将来世代の問題まで、広く関心をもっている

①自主的探究

### スライド 3

### 「考える力」因子の項目例

- 44. 入門的内容の学術図書を的確に読解することができる
- 45. 論理的に構成された2千字～4千字の日本語を的確に作成することができる
- 34. 情報をうのみにせず、論理的に検討することができる
- 35. 自分が錯覚していたり思い込んでいたりする可能性に注意を払っている
- 60. 学問の方法や技術開発のプロセスについて理解できている
- 36. 各種メディアの報道を、距離をおいて批判的に検討することができる

②批判的思考

### スライド 4

### 「関わる力」因子の項目例

⑬相互啓発志向

- 66. 異なった考えをもつ他者とも柔軟に協働することができる
- 65. 異なった考えをもつ他者でも共感的に理解することができる
- 64. 異なった文化や価値観から新たに学ぶことができる

### 「表現する力」因子の項目例

⑬自己表現

- 37. 自分の意見を積極的に表現することができる
- 38. 他者との意見交換を建設的に行うことができる
- 42. 必要があれば、他者に働きかけ巻きこむことができる
- 40. 失敗をおそれずに意義のある行動を起こすことができる

### スライド 5

## 各因子と目標キーワードとの対応

### 学ぶ力

- ・ ⑫自己成長志向
- ・ ①自主的探究
- ・ ⑩社会貢献意欲

### 考える力

- ・ ⑤日本語コミュニケーション力  
(読み書き力)
- ・ ②批判的思考
- ・ ⑪学問を尊敬する態度

### 関わる力

- ・ ⑬相互啓発志向

### 表現する力

- ・ ③自己表現
- ・ ④行動力

## スライド6

### 3 「4つの力」にまとめることの妥当性

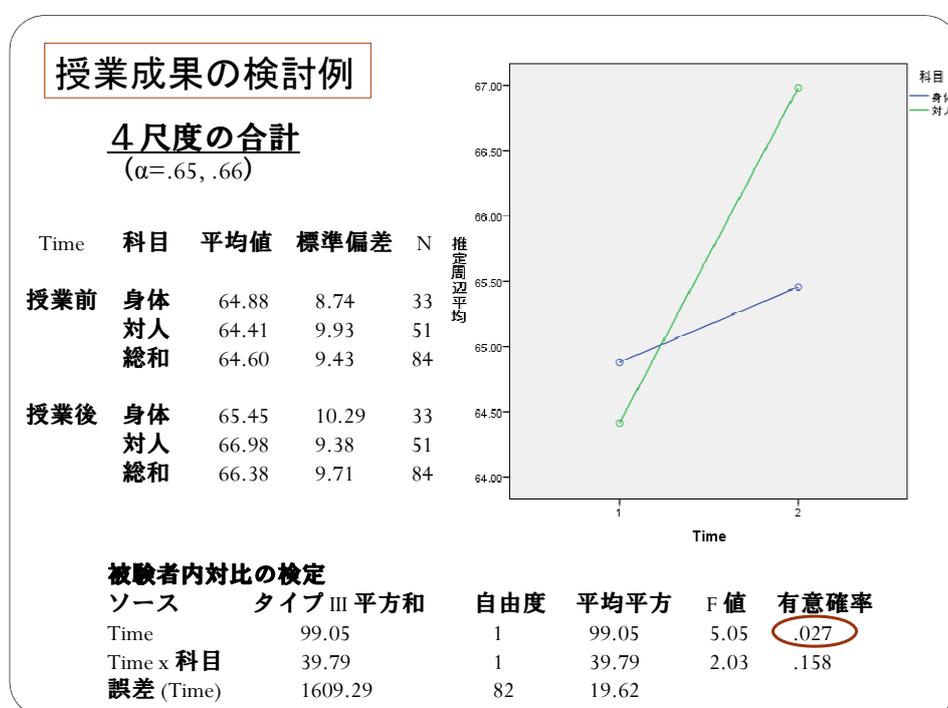
こうした4分類がどの程度妥当であるかについては継続した検討が必要ですが、先行研究との比較も一つの手がかりとなるでしょう。ジェネリックスキルに関する学生視点からの調査としては、国内では島根大学の卒業生調査が知られています(山田・森, 2010)。かなり包括的な40項目のうち「どの程度身についたと思うか」の自己評価を尋ねたところ、8因子を見出しており、そのうち知識・リテラシー面を除いた4因子(「批判的思考・問題解決力」「社会的関係形成力」「持続的学習・社会参画力」「自己主張力」)は、今回の調査での「考える力」「関わる力」「学ぶ力」「表現する力」にほぼ相当するものといえます。

一方、学生の自己評価ではなく、授業運営や集団内活動などの概念的な整理でも、これまで課題志向の技能と関係志向の技能を分けて論ずることが通常です。課題志向の「学ぶ力」「考える力」、関係志向の「関わる力」「表現する力」の双方を目標範囲に入れておくことは概念的なレベルでも適切といえるでしょう。また、これまですでに多くのモジュール科目で、①自主的探究、②批判的思考、③自己表現に重点をおいた授業設計がなされている(これらが重点目標とされている)ことから、「関わる力」以外の3つの因子は実践的にも受け入れやすいといえることができます。学生による授業評価でも、全学モジュール用の追加項目として目標キーワードの①②③に関する項目が用いられています。今後、「関わる力」についても追加を検討する必要があるでしょう。

最後に、モジュール科目の授業成果が4つの力の尺度のうちで現れるかどうかも試験的に確認しておく必要があります。これは、アクティブラーニングを進めていくことが所期の学習成果に結びつくかどうかのより本質的な検討につながるものでもあります。現時点では、とくにこれら4つの力を意識した授業において学生の自己評価に変化がみられるかどうか、また4つの力の尺度をどう構成するかの試験的な検討の域を出ません。しかも、

たとえ変化があったとしても、それは1学期間の学生の様々な活動を経たためであり、モジュール科目の成果とは限りません。但し、もし変化がみられなかったとすれば、モジュール科目の目標を適切に反映していない整理の仕方（あるいは尺度の作り方）かもしれないので、さらに検討を要するということになります。

スライド7に示すように、あるモジュールの2つの科目（いずれもモジュールIIの科目で、「身体」とは「身体・関わり・言葉」、「対人」とは「対人世界の心理学」を指します）において、4つの力の試験的な総合尺度の上で学生の自己評価を求めたところ、全体的には授業前から授業後に得点が向上したことが確認されました。今後、より大規模な調査で4つの目標への整理を確認するとともに、自己評価用の適切な尺度の開発やルーブリックの整備を進めていくことが課題となります。併せて、標準検査（基礎力テストなど）や他媒体による評価との相関を検討し、学習成果指標としての妥当性を確認する作業も必要です。



スライド7

#### 4 ルーブリックの整備

ルーブリックとは学習成果を評価する際の道具の一つで、評価観点と評価基準のマトリクスとそれぞれのセルに入った具体的記述から成っています。ルーブリックを作る意義は、それに応じた学習活動や学習評価方法を工夫する一助となるとともに、学生にも到達目標や評価の仕方が明示されることで学習が促進されるという点にあります。

現時点での4つの力のルーブリック案を別紙2に示します。また、このような指針を使うことで、スライド8に例示しているように、4つの力それぞれに対応した学習活動や評価方法の例を考えることができます。

将来的には、このルーブリックをより具体的なものにしていく必要があります。例えば、米国で浸透しつつある VALUE (Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education) のルーブリックは、各機関でカスタマイズ可能な基盤的ルーブリックです。別紙 3 にそのうちの「批判的思考」のルーブリックを例示していますが、ここでは5つの評価観点に分けられています。本学での教養教育の目標をより具体的に提示することで、教員にも学生にも、そして様々なステークホルダー（保護者、高校、地域、企業ほか）にも基本的な教育の方向がわかりやすくなることから、4つの力それぞれを今後少しずつ具体化していくことが求められます。その過程では、モジュール科目の担当者からフィードバックを得ながら実践的に使いやすいものにしていく努力が不可欠です。

### 参考：学期毎の学習活動と振り返りの例

4つの育成スキル	学ぶ力	考える力	関わる力	表現する力
学習活動例	事前課題 調べ学習	ディベート ブックレポート	グループワーク ディスカッション	プレゼンテーション コラボレーション
評価方法例	自主的取組 のチェックリスト	批判的思考の チェックリスト	参加や貢献の チェックリスト・ 相互評価	積極性や表現力の チェックリスト・相互 評価
成果の評価	5段階のルー ブリック	同左	同左	同左
自己評価	学習成果の 振り返り	同左	同左	同左
評価スコア	到達目標に 応じた重み	同左	同左	同左
学期毎のまとめと フィードバック	ポートフォリオへ の入力と次期 の目標設定	同左	同左	同左

### スライド 8

#### 5 おわりに

本稿では、モジュール科目に関して、学生の自己評価調査をもとにした目標整理の試みを報告しました。現行の13の目標キーワードのうち、ジェネリックスキルに関わる9つの目標を大きく4つの力として再構成することで、モジュール科目の到達目標をより明確にできたのではないかと思います。今後、実践的に妥当な目標整理と適切な尺度構成、使いやすいルーブリックの整備等を行うことで、授業設計や学習評価の見通しが少しでもよくなることを願っています。モジュール科目の担当者との協力体制がなければ進められない事柄ですので、忌憚のないご意見をいただくとともに教育改善の諸提案をいただくことができれば幸いです。

## 引用文献

AAC&U. (2010). *Assessing outcomes and improving achievement: Tips and tools for using rubrics*. Washington, DC: Author.

山田剛史・森朋子 (2010). 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割 日本教育工学会論文誌, *34*, 13-21.

山地弘起 (2013). 長崎大学におけるアクティブラーニング事例第1集 大学教育機能開発センター